

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	人間関係と孤独感と甘え
Author(s)	黄, 萍
Citation	HABITUS , 22 : 65 - 82
Issue Date	2018-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/45625
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045625
Right	
Relation	



人間関係と孤独感と甘え

黄 萍

(燕山大学講師 広島大学大学院文学研究科博士課程後期)

1. はじめに

社会学者である加藤秀俊は、「人間関係、それは、難しいものである。それはたいいていの人にとって悩みのタネである。どうにかしたいのだが、どうにも手におえないものである。要するに、人間関係というのは『問題』なのである」¹⁾と指摘する。彼によれば、人間関係の「問題」の性質と内容は人によって千差万別であるが、現代社会の殆どすべての人間は、自分と他の人間との関係をどう調整してゆくに神経をすりへらしているとされる。家庭では親子のつき合い方、近隣社会では向こう三軒両隣の住人との関係、職場では上司や部下や同僚の関係が問題になるし、また恋人関係や嫁姑関係においても古今東西を通じた普遍的な問題がある。つまり、社会のいたるところで、いろんな種類の「人間関係」が成立し、そのそれぞれの関係がつねに問題を孕んでいるとされる。例えば、「こっちが善意でしたことが、相手方にはそのまま通じないことがしばしばある。通じないどころか、悪意にうけとられてしまったりもする」(同4頁)ように、人間関係における誤解が往々発生している。それは、フィリアの愛が必要とする、お互いが「善意」とみなす表徴を欠くことに起因する。一言で言うと、このように人間関係は難しいのである。

しかしながら、不思議なことに、人間関係を難しいと思いつつも、昔から現在まで、人間関係を簡単に捨てて、一人で生活しようとする人間は殆どいない。「うまくゆかない」「難しい」「煩わしい」などと嘆きながらも、やはり何

とかうまくできるように努めるのは、一体何のためであろうか。もしかすると人間は他の人とかかわっていなければ生きてゆけないのだろうか。

これに関連して加藤は、詩人の寺山修司を援用して、自分宛てに手紙を毎日書き続けている老人の例を挙げる。²⁾この例は、一見ばかばかしいが、実はまじわりを求めるとごく自然な心が閉ざされて、どんなふうにして、他人と知り合いになったらいいのか、それが分からないでいる人間の姿を凛々しく伝えている。「自分宛のはがきを書いているのは、上の話に出ている老人だけでない。誰しものが心のなかで、自分宛の手紙を書き続けている」(同32頁)という。

また、加藤はある大学で行われた孤独実験の例を挙げる。それは、被験者が、完全に防音装置をほどこされて、外界から遮断されたカプセルのなかに入って、三日三晩のあいだ、ひとりで暮らすというものだ。被験者は、食べ物をきちんと供給されるし、眠ることも自由である。スライドに投射された文字による、外界からの通信も必要な場合には与えられる。が、たいていの人々は、この孤独実験に堪えられなくて、三日目には、幻覚や幻聴を起し、発狂寸前の状態を示したという。

さらに、加藤は知り合いを作りたくて、週刊誌のお便り欄に投稿して友だちさがしをする人や「誰か私に話しかけてください」という札を胸にかけてベンチに座り続けていた人もいたことを指摘する。

上述のように、誰かに話かけたい、話しかけられたい、というような、まじわりを求める心を誰もが持っている。つまり、人とはまったくかかわらない生活や、カプセルのなかの孤独な生活は、現実社会においてはまずはないのである。が、それらに近い状態もしくは似たような状態に陥っている人間は、現代社会においても、しばしば見うけられる。または、人ごみの中においても、やはり自分は一人ぼっちであると感じている人間も多いのである。特に大都市の場合、同じマンションやアパートに住んでいる隣人同士であっても、お

互いに一度も声をかけ合わないのは珍しくない。そのくせ人々は、FacebookやTwitterやLineやWeChatや微ブログなどさまざまなネット上の社交手段を通じて、誰かと繋がろうとする。やはり孤独感に包まれ、孤独でたまらないのである。

では、改めて孤独感とは何であろうか。なぜ人間は孤独感に包まれるのか。この問題を探るために、本稿は、まず「孤独感」の心理学的定義をいくつか紹介し、次にフロムの「孤独感」論を取り上げ、そのうえで土居の甘え理論と照らして孤独感と甘えの関連性を明らかにする。

2. 孤独感とは何か

サリヴァン(Harry Stack Sullivan)は、孤独感「人間への親密さ、対人関係への親密さの要求が十分に満たされないことにかかわる過度の不快感を伴った激動体験である」³⁾という。ワイス(Robert Stuart Weiss)は、「孤独感は一人心きであるために引き起こされるのではなく、一定の必要とされる社会的関係のないことによって引き起こされる……。孤独感、ある特定の型の社会的関係の欠如への反応であると思われる。より正確に言うならば、特定の社会的関係の準備の欠如に対する反応である」⁴⁾という。またゴードン(Suzanne Gordon)は、「孤独感、親しい人がいないといったある種の人間的接触の欠乏から生じた剥奪の感情である。この空虚なところに人は何らかの期待を持つとするので、ある期待された人間関係が欠如すると剥奪の感情を引き起こすが、孤独感はこの剥奪の感情によって特徴づけることもできる」⁵⁾という。さらにヨング・ギールフェルト(Jenny de Jong-Gierveld)は、「孤独感、個人の実際の対人関係と望んでいる対人関係のずれを不快、ないしは不満と感じる経験である。特に適当な期限内に望む対人関係を実現できなと感じたとき孤独感を感じる」⁶⁾という。このように、心理学者は孤独感に関してさまざまな定義を提出している。それらは、それぞれ異なっているように見えるが、ただし、

以下の三つの点で一致しているとL.A.ペプロー&D.パールマン(Peplau, Letitia Anne&Perlman, Daniel)は指摘している。「第一は、孤独感は個人の社会的関係の欠如に起因するという点である。第二は、孤独感は主観的な体験であることである。客観的な社会的孤立とは同じ意味ではない。人は一人でいても孤独感を味わうとは限らないし、また群衆のなかにも孤独感を味わうこともある。第三は、孤独感の体験は不快であり、苦痛を伴う点である」⁷⁾と。要するに、孤独感とは、一人でいるか、群衆のなかにいるかにかかわらず、個人が社会的関係を欠くことに起因する、苦痛を伴うある種の不快感である、と纏められる。だがこの定義は十分ではない。L.A.ペプロー&D.パールマンは、孤独感の原因を個人における社会的関係の欠如に帰しているが、対人関係への不満、もしくは人間関係の心理的な親密さの欠如などに帰すほうが適切だと思う。つまり、孤独感というのは、対人関係において、双方の関係性が自分の思うようにならないとか、自分の期待するようにならないとかいったように、望みと実際とのずれによって、心的欲求が満たされないことから生じる不快や不満である。あるいは、自分が人に理解されずに空虚な気持ちになって、あたかも満足感が剥奪されたように感じることである。結局、孤独感も、理想と現実の衝突によって起きる、ある種の歪んだ形の心的動きである。

こうした心の歪みは、普遍的な親密さへの要求の裏返しでもある。フロム・ライヒマン(Frieda Fromm-Reichmann)によれば、それは「すべての人間が幼児期より生涯を通じて持ち続ける」⁸⁾ものだと言われる。この指摘は「甘えは本来乳児が母親に密着することを求めることである」とする土居の考えにも相通じる。とすれば、孤独感はある種の屈折した甘えでもあるのだ。このような孤独感と甘えとの連関については、後節で論じていきたい。その前に、対人関係においてなぜ満足できる人間関係の構築が難しいのかを検討する。

3. 人間関係の難しさ

人間関係の難しさといえ、二千年以上も昔に、ギリシアの哲学者、アリストテレスの愛弟子テオプラストスの書いた『人さまざま』⁹⁾が想起される。テオプラストスは、古代ギリシア社会の人間関係をシニカルにながめ、その愚かしさを風刺文学ふうに書き残した。加藤は二千年以上も昔の人間観察がそのまま現代の人間関係のカリカチュアとしても百パーセント通用するというのは、考えようによっては重大なことだとする。というのは、人間のもつさまざまな問題領域を歴史的に振り返ってみると、そこにはおおむね、なんらかの「進歩」があるのに、人間関係にはあまり進歩が見られないからである。

では、「進歩」とはなにか。加藤によれば、それは問題解決の積み重ねだとされる。人間には、「問題づくり」と「問題解決」という特殊な能力があって、このふたつの能力をつねに発揮しつづける。それを説明するために、加藤は日常生活における「問題」を例として挙げる。例えば、「食べ物が無い、というのは人間の生存にとっての基本的「問題」であるが、その問題を解決するために、農業という方法を考え出す。水がないのが問題ならば、井戸を掘ったり池に水をためたりすることを考える。そして、解決された問題はすべての人々の共有財産になり、それは同時に、次の世代に譲りわたされてゆく。ある世代の解決した問題に次の世代があらためて直面したりする必要はない。いったん解決した問題は次の世代にとっては言わばあたりまえのものとなって継承されるのである」(同8頁)と。加藤が説明しているように、人間は、技術などの領域では、祖先が遠い昔にいったん解いた問題を現代人があらためて解く必要はめったになく、問題解決の諸問題は積み重ねがきくのである。ところが、人間関係の領域ではどうやら問題解決の積み重ねがききにくいようである。その証拠として、今触れたテオプラストスの『人さまざま』の一節である「ゴマスリ野郎」のシナリオを加藤は挙げる。要するに、古代ギリシアの生活と現代文明のなかでの

生活とのあいだには大きな開きがあるが、人間関係の問題に関するかぎり、ギリシア人と現代人は全く同じような状況で生きているのである。この問題ばかりは、積み重ねがきかない。つまり、人間関係の領域では、さっぱり「進歩」がないと加藤は指摘する。昔から人間が直面する物質問題は次々に解決され、その蓄積によって進歩がなされてきた。しかし人間関係の問題は、さほど進歩せず、人類にとって永遠の問題である。人間関係の問題を解決する知恵はいつの時代も昔のままである。

よって、人間関係が難題であるばかりか、人間は人間関係を解決する知恵を先祖から継承することも殆どできないがゆえに、人間関係は永遠の問題でしかない。それに、人間関係は難しいので、人とのかかわりを求めて、たえず誰かとかかわっていたいものである。つまり、人間関係の問題から永遠に離れることのできないのが、人間の宿命なのである。

加藤は、人間関係は人類の続くかぎり人間が直面しなければならない永遠の問題であると同時に、きわめて現代的な問題だと指摘する。「『人間関係』という言葉が作られたのは二十世紀になってからのことであったが、あらためてこういう言葉で人間関係を概念化し、問題化しなければならなかったのは、現代社会での人間関係が、かつてなかったような新たな段階にさしかかってきたからである。あるいは、現代社会では、人間関係処理が、社会の中での中心問題になってきたからである」(同9-10頁)。このとおりだとすれば、「人間関係」という言葉は今から百年ぐらい前に生まれたことになる。

が、この判断の根拠は明らかではない。しかしその詮議はあまり意義がないので、これ以上問わないことにする。というのは、どの人間も、生まれつき、なんらかの形で他の人と関係しているから。言い換えれば、いつの時代であっても、人間が存する限り、ある種の人間関係が存在するから。ただし、「人間関係」という言葉がいわゆる人間関係が生じたときに同時に生まれたかどうかは、実

際に文献を調べてみなければ正確には分からない。しかしながら、加藤の言うように、「人間関係」という言葉が二十世紀の産物であっても、現在の人間関係を表す場合も、またギリシア時代の人間関係を表す場合も、全く違和感がないと思う。よって、「人間関係」という言葉の誕生や歴史に関してこれ以上探求しなくてもよいと考える。

加えて、もう一つの理由として、前に触れた孤独感の生まれた時代が挙げられる。孤独感は現代社会の所産であるという意見があるが、その意見にはあまり賛成できない。というのは、孤独感に関する問題は古い書物にも見られるからである。例えば、旧約聖書の創世記は孤独の苦痛に触れて、神はアダムを創った後、「人がひとりであるのはよくない。彼のためにふさわしい助け手を創ろう」と述べている。また、ミジャスコビッチ(Ben Lazare Mijuskovic)は、「人はみんないつでもどこでも深い孤独感に悩んできた」¹⁰⁾という。以上のいずれもが、孤独感は現代の所産であるという意見の反例である。よって、孤独感の歴史自体は長い、孤独感の研究史はまだ短いとしか言えない。同様に、人間関係の歴史自体は長い、「人間関係」という用語はまだ歴史が短いとしか言えない。

4. 人間関係と孤独感の先行問題

現代社会において人間関係と孤独感のどちらが先行したかは、おもしろい問題である。考えてみれば、人は生まれながらにして和辻哲郎の言う人間「じんかん」であり、ある種の人間関係がすでに存している。すなわち、人という生き物は、そもそもがこの世に生まれ出たときから、すでに「人間＝他者との関係性を既に持った間柄のある人」という存在である。もしそうだとすれば、人間関係はあたかも人間が生まれた瞬間に、あるいは、それよりも前に存しているように思われる。例えば、誰かの子として、誰かの孫として、誰かの兄弟として生まれたとすれば、そこには既に親との関係性、祖父母との関係性、兄弟

との関係性が存している。換言すれば、親子関係などの基本的人間関係である血縁関係は、人が誕生した際に、厳密に言えば誕生する前に、すでに決められているのである。しかし、神はなぜアダムを創ったのか、そして、アダムを創ってからまたどうしてイブを創ったのか。それは、神が「人がひとりであるのはよくない」と判断し、寂しさや孤独を避けるためであった。とすれば、人類の発端から言うと、孤独感が人間関係に先行したと考えられるが、現代社会においては、逆に人間関係が孤独感に先行しているように思われる。前述のように、人間は生まれ出た時から既に人とのかかわりを持っている。それは血のつながりのある親族関係であると普通に考えられる。血のつながりの全くない人間関係すなわち、他人関係になると、話はもっと複雑になる。

いずれにしても、人間が一人で生きられないことは言うまでもない。また、単なる血縁関係だけでも生きられそうもない。それよりもっと広い社会性を有する他の人間関係が必要になる。それらの人間関係においては、すなわち血縁関係が先行している他の人間関係においては、その関係性や親密さへの不満から孤独感が生じうる。この場合に、孤独感が先行しているか、それとも人間関係が先行しているかは、簡単に言えない。それは「鶏が先か、卵が先か」といった議論に似ている。平たく言えば「ニワトリとタマゴのどちらが先にできたのか」といった因果性のジレンマを引き起こす。これは原因と結果が相互に連鎖する難しい問題である。また、人間関係と孤独感とは「鶏と卵」のような因果関係以外の関係性も持ちうるがゆえに、この問題はいつそう難しいのである。

要するに、人間関係は人類が誕生したときに生まれ、人間が存する限り続くものであると思う。人類の歴史の全体からすれば、まず孤独感から人間関係が生まれ、そして人間関係から孤独感が生まれる。しかし、両方が混じり、どれがどれに先行するのかがよく分からない場合もある。人間関係は長い歴史を通じて、またいろんなことに関連して現れる。

周知のように、人間には、ライフサイクルの各段階において、さまざまな種類の関係が重要となる。幼い子供の場合は、両親との関係が重要になり、子供が成長するにつれて、仲間との関係がだんだん重要になってくる。大人になると、しばしば恋人や配偶者との関係が第一になる。が、各段階で求められる関係が十分でないと、孤独になりやすい。つまり、人は、いくつかの人間関係を持っていても、各段階での中心的な関係を欠くならば、孤独感を持つ。したがって、孤独感の関係の量的欠如から生まれるだけでなく、関係の質的欠如からも生まれる。例を挙げると、人間が生活問題に取り組むときに最も気になるのは、衣食住である。いったんそれらの問題が解消すると、次に考えるのは、物質面よりも意識面の問題である。というのは、人間の探求心は、見える物質的なものから、見えない精神的なものへと高まるのが普通だからである。人間関係の問題においても同様である。真っ先に気になるのは人間関係の量であり、次に気になるのは人間関係の質である。もし人間関係が質的に満たされなければ、孤独感の深淵に陥るであろう。従って、いわゆる関係の欠如とは、関係の量的欠如と関係の質的欠如の両方を言うのである。

関係欠如に関するタイプ論のなかでもっともよく知られているのは、ワイス (Robert Stuart Weiss) が孤独感を情緒的孤独感と社会的孤独感とに区別したものである。ワイスによれば、情緒的な孤独感とは、緊密な情緒的愛着がないときに現れ、その解消のためには、ただ、別の情緒的愛着との統合、あるいは、失われていた情緒的愛着との再統合によって埋め合わせされるしかないとされる。実際に他人との交流があろうと、なかろうと、この種の孤独感を味わっている人々は、まったく一人ぼっちであると感じがちである。それに対し、社会的孤独感とは、魅力的な社会的ネットワークを持っていないことに起因し、その解消のためには、ネットワークに近づくしかないとされる。¹¹⁾

ワイスの言う情緒的孤独感とは、緊密な情緒的愛着がないときに現れ、社会的

孤独感は、魅力的な社会的ネットワークを持っていないことから現れる。いずれもある種の関係の欠如に起因する。正確に言うと、それは望ましい関係の欠如に起因し、根本的には、人間関係の理想と現実のずれによるものだと考えられる。

このように心理学的な意味での「孤独感」は、人間関係から出発して、また人間関係に辿り着き、結局それは、人間関係の「理想像」→「理想像の崩壊」→「理想像の再構築欲求」→「理想像の実現難」という過程を辿る。すなわち、それは根本的には、人間関係の理想と現実のずれによるものだと考えられる。

5. 孤独感と甘え

土居の言う甘えられる親子関係は、人間関係の理想像であって、他の社会関係との比較を絶した親密な人間関係であり、蜜のような甘い望ましい対人関係である。そのような親子関係は甘えの人間関係の理想である。その現実形態は多種多様であり、プラス形態を有する「健康で正直な甘え」もあれば、マイナス形態を有する「屈折した甘え」もある。前者は、甘えられる対人関係における甘えであるのに対し、後者は、甘えたいが甘えられない対人関係における甘えの変形である。この違いは、甘えたいが甘えられる人間関係の理想と甘えたいが甘えられない人間関係の現実とのずれから生じる。

こうして、望ましい人間関係の欠如に起因する孤独感と、屈折した甘えの間には、切っても切れない関係があることが明らかになる。甘えに積極的甘えと消極的甘えがあるのと同様に、孤独感にも積極的孤独感と消極的孤独感がある。孤独感が積極的であるか消極的であるかは、対応する人間関係が望ましいかどうかによる。望ましいほど相関的だと普通に考えられるが、甘えに関してはそれだけでなく、双方の甘え比例ともかかわる。いずれにしても、両者は親密で満足できる人間関係の欠如に起因する点で共通する。それがゆえに、心が満た

される、甘えられる親子関係のような他の人間関係は、いっそう価値が高い。

実は、土居の甘え理論よりもボウルビィ (John Bowlby) の愛着論が先行する。ボウルビィによれば、「乳幼児と母親(あるいは永続的な母親代理者)との人間関係が、親密で、継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされているような状態が精神衛生の根本である」¹²⁾とされる。また、彼は、精神神経症や人格障害の多くが、母性的愛撫の欠如や、母性的人物との断絶によってもたらされると指摘する。この指摘は、親子関係のいかなる状態がその後の人間関係に多大な影響を与えるのか、なぜ親密で満たされた状態が人間の期する理想的精神状態であるのか、を裏付けている。従って、孤独に陥りやすい人は、もしかすると乳幼児の時に母親との人間関係が不十分だった可能性がある。

土居は『甘えの構造』の第五章の「現代人の疎外感」の一節において、「人間は生命的枯渇感を覚え、これを回復するため今一度裸の人間にかえって感性的に生きようと決心する。そしてこの新たな探求は、…母性的なものへの憧れ、言い換えれば甘えに導かれているように思われる」¹³⁾と述べ、またその次に、夏目漱石の『三四郎』を取り上げ、田舎から東京に出てきて現代文明に感じ取った三四郎の不安を記している。「世界はかように動揺する。自分はこの動揺を見ている。けれどもそれに加わることはできない。自分の世界と現実の世界は一つの平面に並んでおりながら、どこも接触していない。そして世界はかように動揺して、自分を置き去りにして行ってしまう。甚だ不安である」(同235頁)と。土居はこの置き去りにされるという感覚が甘えの心理を前提としていると言い、現代人が人間疎外という言葉で表現する感覚の実体は、幼児が母親に置き去りにされたときに感じる生命的な不安だとする。

土居の言う「現代人の疎外感」や「生命的な不安」は実にエーリッヒ・フロムの「孤独感」論に相通じていると思う。

フロムは、幼児が母親から離れていく過程を「孤独」として説明している。

それは個人が原始的な絆から次第に脱出していく過程であるとされる。この原始的な絆はフロムによって「第一次的絆」¹⁴⁾と呼ばれ、幼児に安定感や帰属感を与える。こどもは生まれると、もはや母親とは一体ではなくなり、母親から離れた一個の生物学的存在となる。フロムは母親の肉体から独立することを、個人的な人間存在のはじまりといい、さらにこの独立を「生物学的分離」と呼ぶ。というのは、それはたんに二つの肉体が分離したことで、生物学における分離であり、機能的には、幼児はまだ母親の一部分であり、食物、肉体の移動、その他生命に関する重要な点ですべて母親の世話をうけているからである。

しかし、いったん母親の肉体から分離したら、各能力がどんどん発達していき、徐々に、母親やその他のものを、自分から独立している存在と考えるようになる。そして第一次的絆が次第に断ち切られるにつれて、独立したいと思うようになる。フロムはこの独立を求める過程を個人の「個性化」の過程と呼ぶ。さらにこの過程には二つの側面があるという。その一つは子どもが肉体的にも感情的にも精神的にも、ますます強くなっていく面である。自我の力の成長ということもできる。今一つは、孤独が増大していく面である。つまり、個性化の過程は「個人のパーソナリティがますます力を獲得し完成していく過程であるが、同時に他者と一体になっていた原初的な同一性が失われ、子どもが他者からますます分離していく過程でもある。この分離が進む結果は、淋しい孤独となり、はげしい不安と動揺を生み出す」(同40頁)。もし分離と個性化の進む一步一步が自我の成長と対応しているならば、その子どもの発達は調和のとれたものとなるはずであるが、しかしながら、実際にはこのようなことは起こらないとフロムはいう。というのは、「個性化の過程は自動的になるのに反し、自我の成長は個人的社会的な理由でいろいろと妨げられる」(同41頁)からである。従って、この二つの傾向のずれがたえがたい孤独感と無力感を生み出すのである。それによる不安を解消するために、人間はかつて安定を与えてく

れた第一次的な絆を求めようとする。しかし、その絆は、ひとたびたちきられると、二度と結ぶことはできない。こうして、すべての人間との積極的な連帯と、愛情や仕事という自発的な行為によって、個別化した人間を再び世界に結び付けるしかない。

フロムは「幼児が母親から離れていく過程において個性化するほど孤独が増大していく」といい、「孤独」を人間の個性化が進む結果として取り扱い、「孤独感」をそこから生まれた不安と動揺として理解している。それは土居の言う幼児が母親に置き去りにされたときに感じるものと全く同じものである。土居は、それを「生命的な不安」といい、「現代人の疎外感」と呼ぶ。ただし、疎外感≠孤独感であることに注意しなければならない。そのことはそれぞれ対応する反対語を思い浮かべるとすぐ分かると思う。反対語として、「疎外」には「親密」、「不安」には「安心」が思い浮かぶが、「孤独」には何が思い浮かぶだろうか？ 即答できる反対語が簡単には思い浮かばないだろう。なぜなら、疎外感や不安は人間にとって絶対的にマイナスな心理感覚であるのに対し、孤独感はずもマイナスイメージばかりではないからである。「孤独」は、確かに「一人である」ことを意味するが、「一人でいられる」人間ならば、「孤独」はおそらくその人の追い求める境地であろう。しかし、「一人でいられない」あるいは「一人であるのが嫌な」人間が一人でいれば、多分「一人ぼっち」や「不安」などのマイナスの心理感覚が生み出されるだろう。だとすれば、「孤独」は「孤独感」とは異なる。「孤独」は「一人である」状態のことであり、その状態についての客観的記述である。それに対し、「孤独感」はその種の状態から生まれた心理的感覚である。その感覚というものは、人によって違う。積極的なものあれば、消極的なものもある。それが前述した積極的孤独感と消極的孤独感の相違である。

6. まとめにかえて

このように見てくると、人間関係と孤独感と甘えとの関連性が明らかになる。孤独を感じるから人間関係を欲するのか、それとも人間関係の欠如が孤独感を引き起こすのかの議論は、既に見たように、それは「鶏が先か、卵が先か」といった議論に似ている。どちらが先行するのかは、簡単には結論づけられない。が、孤独感が人間関係の欠如に起因するものもあれば、量的な欠如に起因するものもあれば、質的な欠如に起因するものもある。というより、満足できる人間関係もしくは甘えられる人間関係の欠如に起因するというほうが適切である。根本的に、孤独感は人間関係の理想と現実のずれによるものである。すなわち、親密で満足できる人間関係の欠如に起因する点で、孤独感は所謂甘え、すなわち屈折した甘え(消極的な甘え)と共通する。一方で、フロムは幼児が母親から離れていく過程で生まれる不安を孤独感として理解する。フロムは「第一次的な絆」から離れるほど「孤独感」が増大していくという。フロムの言う「第一次的な絆」はすなわち土居の言う甘えられる親子関係である。さらにフロムはそこから生まれた不安と動揺を解消するために「積極的な連帯」によって再び世界に結びつくという。ここでの「積極的な連帯」は、実は「第一次的な絆」のような絆であり、土居の言う「他の親子関係のような甘えられる人間関係」である。すなわち、土居の甘え理論とフロムの孤独感論はいずれも親子関係(親子の絆)を前提とし、またいずれも努力して親子関係(原始的な絆)を取り戻そうとする点で共通する。それに、二者はいずれも他の人間との親密なかかわりの構築(世界と結びつくこと)によって、母親から離れていく過程で生まれる(生命的な)不安を解消しようとする。

こうして、孤独感が、満足できる人間関係もしくは甘えられる人間関係の欠如に起因するものと見なされようとも、人間の個性化が進む結果と見なされようとも、甘えとは切っても切られない関係を持っていることがわかる。土居は、

現代人の疎外感「甘えの心理を前提にしている、また甘えに導かれている」という。従って、フロムの言う孤独感も、根本的には土居の言う甘えの心理を前提にし、また甘えによって救われるのである。

註

- 1) 加藤秀俊 『人間関係—理解と誤解』 中央公論社 1966年 2頁。以下本書からの引用は「同」として頁数のみを記す。
- 2) それは次のような内容である。
ある日、近所の女の子が言った。
『うちのおじいちゃんたら、毎日のがきを書くのよ。それで、そののがきを毎日駅の向こうの郵便局まで出しにゆくの。』
『へえ』と私は女の子の祖父の顔を思い出しながら言った。『そんなに毎日、誰に出すんだね?』
女の子はあっさり教えてくれた。『自分によ。』
『自分に?』
『そうなの。自分で自分にはがきを出して、それが配達されると、また返事を書くの。それを毎日毎日繰り返すことで、さびしいのと暇なのとをまぎらしているのよ。』
- 3) Sullivan,H.S., The interpersonal theory of psychiatry.New York:Norton, 1953, p.290.
- 4) Weiss,R.S.&Bowlby,J., Loneliness : The experience of emotional and social isolation.Cambridge, Mass. : MIT Press, 1973, p.17.
- 5) Gordon,S., Lonely in America. New York : Simon&Schuster, 1976, p.26.
- 6) Jong-Gierveld,J.de., The construct of loneliness : Components and measurements. Essence, 1978, p.221.
- 7) L.A.ペプロー&D.パウルマン編 加藤義明監訳 『孤独の心理学』 誠信書房 1988年 4頁。
- 8) Fromm-Reichmann,F., Loneliness.Psychiatry, 1959, p.3.
- 9) テオプラストス著 森進一訳 『人さまざま』 岩波書店 1982年。
- 10) Mijuskovic,B.L., Loneliness in philosophy,psychology,and literature.Assen : Van Gorcum Publishers, 1979, p.9.
- 11) Weiss, R.S.&Bowlby,J., Loneliness : The experience of emotional and social isolation.Cambridge, Mass. : MIT Press, 1973, p.18-19.
- 12) Bowlby,J., Maternal Care and Mental Health.Geneva : WHO;London : HMSO;New York : Columbia University Press, 1951, p.178-201参照。
- 13) 土居健郎 『「甘え」の構造』 弘文堂 1971年 234頁。

人間関係と孤独感と甘え

- 14) エーリッヒ・フロム著 日高六郎訳 『自由からの逃走』 東京創元社 昭和26年初版 34頁。

Interpersonal Relationships, Loneliness, and “Amae”

Huang Ping

Lecturer, Yanshan University

Graduate School of Letters (Doctor’s Degree Program), Hiroshima University

Psychologists have proposed that loneliness stems from a lack of interpersonal relationships, which can be quantitative in some cases and qualitative in others. In the current study, loneliness is proposed to be fundamentally caused by the deviation between the ideal and the reality of interpersonal relationships. Therefore, it may be more appropriate to describe loneliness as a result of failing to obtain “intimate and satisfactory relationships”.

Takeo Doi defines “amae” as the time at which an infant’s thought processes have developed to a certain stage involving the pursuit of a mother’s mental activity (emotion), based on the understanding that the mother and the self exist independently. In previous studies, the author found that the pursuit of mothers by infants typically evolves into the pursuit of intimacy with others outside the mother-child relationship. The phenomenon of distorted amae (negative amae) develops when the desired intimacy is not available. Thus, the author proposes that loneliness is linked with amae, particularly the failure to obtain sufficiently intimate relationships.

Fromm has proposed a different interpretation of loneliness, referring to the process of a baby leaving their mother as a form of loneliness. In Fromm’s interpretation, there are two contradictory sides to this process: “the growing personality” and “the growing loneliness”. Fromm proposes that the unbalanced development of these two sides

results in uneasiness, which manifests as loneliness. To dispel this “uneasiness”, the child may search again for the “original connection” that once made them feel relieved. However, at the moment they were separated from their mothers, it became impossible to return to the original state. In Fromm’s conception, people can only establish a close connection with the world through “positive relations” such as “love” and “work”. In the author’s opinion, Fromm’s “original connection” is roughly equivalent to Doi’s “intimate mother-child relationship”. Doi’s *amae* and Fromm’s loneliness are connected in two important ways. First, both are premised on mother-child relations, in which the child ultimately seeks to recover the “original connection”. Second, in both conceptions, the child seeks to resolve “uneasiness” by seeking intimate connections with others (connection with the world).

Overall, the author believes that loneliness, whether it is caused by a lack of intimate or satisfactory relationships, or as the result of personality development, is closely associated with *amae*. Thus, loneliness is premised on *amae*, and can be resolved by dispelling *amae*.